

社会主義經濟論序説

斎藤 稔 著

大月書店

さいとう ゐのる
斎藤 稔

1932年 山形県に生まれる
1955年 東京大学経済学部卒業
現 在 法政大学経済学部教授
専 攻 社会主義経済論
共 著 『ソ連・東欧諸国の経済改革』（アジア経済研
究所，1973年）
『社会主義経済論』（有斐閣，1975年）
『過渡期経済の研究』（日本評論社，1975年）
現住所 千葉県船橋市夏見町 1-627

社会主義経済論序説

1976年 5月28日第1刷発行

定価は函に表示
してあります

著 者 © 斎 藤 稔
発 行 者 小 林 直 衛
印 刷 所 (株) 理想社印刷所
製 本 所 (株) 中條製本工場
発 行 所 株式 大 月 書 店
 会社

東京都文京区本郷 2-11-9
電 話 営 業 (813) 4651
 編 集 (814) 2931
振 替 東 京 3-16387

落丁・乱丁本はお取替いたします

まえがき

本書の成立の動機は、社会主義経済に関して筆者がこれまで断片的に書いてきた考えを、ある程度一貫したかたちで表現しようとしたことにある。その要点は序章に集約されているが、一言にしていえば、現代社会主義の歴史的・過渡的性格の認識である。現代社会主義を、段階的あるいは理念的に完結した社会主義とみなすならば、必然的に、ソ連、中国、あるいはその他の、現存する社会主義国家のいずれかを社会主義の模範的な型として記述せざるをえなくなる。実際に、これまでの「社会主義経済論」の多くは、ソ連社会主義を社会主義の模範的な型として記述することに終始していた。近年、中国社会主義を模範的な型として記述するものもあらわれたが、これもその発想としては前者と同じことである。「ソ連経済論」あるいは「中国経済論」とは区別される「社会主義経済論」には、社会主義に関する古典的規定をふまえたうえで、現代社会主義をその歴史的・特殊性の解明を通じて統一的に把握することが要請される。

この点で、「社会主義経済論」としてすぐれているのが、(故) 岡稔・竹浪祥一郎・山内一男三氏の共著『社会主義経済論』(筑摩書房)であった。ここでは、ソ連・中国・東欧の三地域について、各執筆者の独自の分析が展開されている。また、筆者自身も参加した宇高基輔編『社会主義経済論』(有斐閣双書)も、

前者よりも比重は小さいが三地域のそれぞれについての分析を含んでいる。しかし、この両書ともに、執筆者相互間の見解の相違は調整されず、しかも、理論的部分と歴史のあるいは現状分析的部分との不斉合がかなり存在している。このことは、社会主義経済研究の現状では、複数の執筆者の共同作業においては避けられない現象であるといえよう。

本書がその存在意義を主張しうる最大の特徴は、完全に個人による書きおろしである、ということである。当初の構想では既発表の論文の集成であったが、重要な構成部分の欠落があり、しかも重複をさけ論旨を一貫させるためには、ほぼ全面的な書き直しが必要であった。もちろん、個人の著作であるということとは、論旨の一貫性とともに、誤りの一貫性をも含んでいる可能性があることは否定できない。しかしなおかつこのような著作が有意義であると筆者が信じているのは、わが国における社会主義経済研究にはもはや、いわゆる「通説」ないしは「定説」は存在していないからなのである。「スターリン批判」以後、スターリン的な通説は、少なくともわが国においてはくずれさったとみてよい。しかしながら、それに代わるような通説もいまだ形成されていないことは明らかである。しかも「スターリン批判」の内容そのものもまた各人各様にしか理解されていない。このような状況のもとでは、むしろ各人各様の「通説」形成への試行錯誤こそ有意義であって、ここであわて別々の權威をかつぎだすことが必要なのではないはずである。

筆者はさきに、現代社会主義の歴史的・過渡的性格をマルクス以来の過渡期論との関連で検討して独自の過渡期論をうちだし、若干の人々から手きびしい批判をうけた。しかし、筆者の見解は変わっておらず、そのことは本書の全体に盛りこまれている。このことは、決して筆者が自分の見解だけを絶対に正しいと信じこんでいるからではなく、筆者の見解もまた古典の可能ないくつかの解釈の一つである、とみなして

いるからである。筆者の見解とは異なった解釈が成立する可能性も否定できない。しかしまた、筆者の見解が絶対に成立しえない、とする根拠もないはずである。マルクスにしろエンゲルスにしろレーニンにしろ、あるいはスターリンにしても、通り一遍の議論だけで素通りできるような単純な存在ではないのである。今後もくりかえし読みかえされるべきものであり、それを通じてさらに新たな視点がみいだされることもありうるのである。

本書後半の歴史的・現状分析的部分についてとくに指摘しておきたいことは、古典における社会主義の理念との関連で現代社会主義の歴史的・過渡的性格を問題にするかぎり、ソ連社会主義と中国社会主義とのあいだには大きな相違は存在していない、ということである。両者ともに、古典からはかなりの距離にあるのである。ソ連社会主義について、その理念的たてまえよりも実態を問題にするのであれば、中国社会主義についても同じく、その理念的たてまえよりも実態を問題にするべきであろう。実態が不明であるのならば、そのこと自体に大きな問題があることになる。いずれにせよ、中国社会主義を特別視する必要は筆者には見いだせない。

本書の構成は前記のように旧稿を一部利用した書きおろしであるが、利用した旧稿はつぎの通りである。
 「東欧社会主義の歴史的規定条件」〔『経済志林』第三八巻第一号〕……前半部分〔社会主義における二重の過渡期〕を本書の序章に利用。

「マルクス、エンゲルスの過渡期論について」〔『経済志林』第三八巻第三・四号〕……本書第一章。

「レーニンにおける社会主義経済論」〔『経済志林』第四〇巻第四号〕……本書第二章および第五章第一節。

「現代社会主義における計画と市場」〔『経済志林』第四三巻第一号〕……本書第四章第一節、第六章第二節。

「社会主義的經濟統合としてのコメコン」(『經濟志林』第四〇巻第一号)……本書第四章第二節。

「東欧革命における過渡期の課題」(『過渡期經濟の研究』日本評論社)……本書第六章第一節。

「東欧諸国」(宇高基輔編『社会主義經濟論』有斐閣双書、第四章第三節)……本書第六章第一節および第二節。
本書第三章、第五章第二節および第三節、第七章は新稿である。

筆者が社会主義經濟について二〇年以上にわたって教えをうけた宇高基輔先生は、本書の個々の論点については同意されないかも知れないが、本書の成立はなによりもまず宇高先生の多年の御教示によるところが大きい。宇高先生還暦記念論文集『過渡期經濟の研究』にともに名をつらねている宇高門下の諸兄、とくに、筆者の過渡期論を支持されたために井手啓二・長砂實両氏から三人一括して批判をうけた佐藤經明・門脇彰両兄に対しては、ここであらためて感謝の意を表明する。また、近年、社会主義經濟についての各種の研究会を通じて大きな影響をあたえられた十指にあまる同学諸兄に対しても、ここで感謝の意を表明するとともに、一人一人の名をあげることがを省略することをお許し願いたい。筆者は一九七〇年以来、法政大学經濟学部で一部、二部ともに社会主義經濟に関する演習を開設しているが、参加学生諸君との討論を通じて本書成立への有効な刺激をあたえられた。卒業生・在学生諸君に感謝したい。最後になったが、大月書店の方がたには、本書が日の目をみるためにひとかたならぬお骨折りをいただいたことを感謝する。

一九七六年三月三〇日

木原正雄、長砂實編

現代日本と社会主義経済学

四六判 上下各一七〇〇円

上田耕一郎著

先進国革命の理論

四六判 一二〇〇円

藤田勇著

社会主義における国家と民主主義

四六判 一五〇〇円

現代日本の現状と当面する民主主義的変革の課題をふまえつつ、現存の社会主義諸国における経済建設の理論と経験を詳細に検討し、社会主義経済学の体系の再構成を試みた労作

発達した資本主義国における革命の理論的・実践的諸問題と日本における変革の新しい条件をすべく探求した代表的論集。70年代イデオロギ―闘争に先駆的役割を担う注目の書

社会主義国家論の今日的状況と理論史の現段階を歴史的かつ論理的に明らかにしつつ、社会主義国家の現実と理論の諸連関を、豊富な命題と素材に即し精細に分析・展開した力作

目次

まえがき..... I

序章 現代社会主義の過渡的性格..... 三

第一篇 社会主義経済論の形成

第一章 マルクス、エンゲルスの社会主義経済論..... 一六

第一節 資本主義から共産主義への過渡期の性格..... 一六

第二節 社会主義・共産主義の基本的特徴..... 三三

第二章 レーニンの社会主義経済論..... 四〇

第一節 帝国主義と社会主義..... 四〇

第二節 社会主義への直接的移行..... 四六

第三節 過渡期経済論の提起..... 五七

第三章	スターリンの社会主義経済論	六四
-----	---------------	----

第一節	一国社会主義建設論	八四
-----	-----------	----

第二節	「共産主義への移行」	九六
-----	------------	----

第四章	現代社会主義における計画と市場	一二
-----	-----------------	----

第一節	計画化の理念モデル	一三
-----	-----------	----

1	戦時共産主義モデル	一三
---	-----------	----

2	一九三〇年代モデル	一七
---	-----------	----

3	分権モデル	二三
---	-------	----

第二節	国際関係における計画と市場	二〇
-----	---------------	----

第二篇 社会主義建設の歴史的特徴

第五章	ソ連型社会主義の形成過程	一四三
-----	--------------	-----

第一節	十月革命と「戦時共産主義」	一四三
-----	---------------	-----

第二節	ネップへの転換と「過渡期の終了」	一五一
-----	------------------	-----

第三節	ソ連社会主義の戦後段階	一六六
-----	-------------	-----

第六章	東欧諸国における社会主義への過渡期	一六八
-----	-------------------	-----

第一節	「人民民主主義革命」とソ連型過渡期	一六八
-----	-------------------	-----

第二節 自主管理と經濟改革……………	一九三
第七章 中国社会主义における過渡期……………	二〇四
第一節 「新民主主義革命」と「過渡期の総路線」……………	二〇五
第二節 「社会主义建設の総路線」……………	二一七
むすび——先進国型社会主义への課題……………	二三
文献注……………	一

社會主義經濟論序說

序章 現代社会主義の過渡的性格

マルクス主義的な社会主義が、思想としての抽象的な存在から物質的な力としての現実的な存在に転化したのは、一九一七年のロシア革命にはじまる。ロシア革命から半世紀以上を経過した現代においては、ソヴェト社会主義共和国連邦、アルバニア人民共和国、ブルガリア人民共和国、ハンガリー人民共和国、ドイツ民主共和国、ポーランド人民共和国、ルーマニア社会主義共和国、チェコスロヴァキア社会主義共和国、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、モンゴル人民共和国、ベトナム民主共和国、キューバ共和国の合計一四カ国が、「社会主義国」として存在している。この一四カ国の総人口は一二億人をこえ、世界総人口の三分の一に達している。

しかしながら、その他の世界、とくに発達した資本主義諸国に対する、これら社会主義諸国の思想的影響力は決して大きいとはいえない。その大きな原因は、スターリン批判、チェコ事件、「紅衛兵」の行動などに示された現代社会主義の政治的未成熟である。このことはまた、より根本的な問題として、社会主義の思想から現実への転化の仕方にかかわっている。マルクス主義の創始者たちの予見に反して、資本主義世界の中心部分である発達した資本主義諸国においてではなく、いわば辺境部分である後進資本主義諸

国において社会主義をめざす国家が出現したことは、現実の社会主義国家に、発達した資本主義諸国との生産力水準の大きな格差、およびこれとかなりの程度に関連したブルジョア民主主義の未発達という刻印を押すことにならざるをえなかった。出発点としての後進資本主義のこのような負の遺産は、社会主義がいぜんとして部分的な体制にとどまっている状況のもとでは、いまだに克服されていない。したがって、マルクス主義的な社会主義の理念と、現実の社会主義国家の状況とのギャップは大きいのである。

こうした社会主義の現実の姿から、「社会主義とは何か」ということが現在あらためて問い直されている。ここではまず、両極端の傾向をあらかじめ否定しておきたい。その一つは、マルクス主義の古典的規定を教条主義的に解釈して、現代社会主義と資本主義との決定的な差異の存在を認めず、現実の社会主義国家を国家独占資本主義と同一視する傾向である。他の一つは、社会主義の現状そのものを理想化し絶対視して、社会主義国家の現実の諸政策から社会主義の一般論をみちびきだし、その立場から古典を強引に読み直す傾向である。しかしまた、この両極端の傾向を有効に批判するためには、現代社会主義の歴史的・過渡的性格が積極的に論証されなければならない。

いずれにせよマルクス主義の古典と社会主義の現状とを直結して論じることが不可能である。マルクス主義の創始者たちは、後述するように、未来社会の詳細な見取図を仕上げることをみずからの課題とはしていなかった。社会主義の現実の国家としての存在形態を、古典からの断片的引用で一刀両断に割り切ることはできない。また、マルクス主義的な社会主義を問題にするかぎり、古典を完全に無視して現状からのみ社会主義を説明することは許されない。古典の強引な再解釈による現状美化も、結果としては古典無視にひとしい。現代社会主義の特殊な状況は、資本主義から社会主義への移行についての、古典による抽象的な想定が実現しなかったことにその原因があるのである。

現代社会主義の歴史的・過渡的性格は、現代社会主義が二重の意味での過渡期にあることによって規定される。資本主義から社会主義への移行の開始が後進資本主義諸国において着手され、しかも社会主義への移行がいまなお世界の一部にとどまり、資本主義と社会主義との長期にわたる共存が予想されるかぎりでは、現在の社会主義は部分的（地域的に限定された）社会主義である。全世界的な社会主義の勝利を予定した社会主義の全体像は、部分的社会主義の中にもその一定の表現を見出すが、部分的社会主義が社会主義の完全な全体像を代替することはできない。したがって、現代社会主義は、古典的規定による、資本主義から共産主義への、いわば「本来の過渡期」と、現在の部分的社会主義から全世界的社会主義への「世界的過渡期」の二重のからみあいの中にあるのである。しかも、マルクス、エンゲルスにおいては、後述するように、「本来の過渡期」に関しても、資本主義から共産主義の第一段階（すなわち社会主義）への到達は一挙に実現すると想定されており、共産主義のより高度の段階への到達にさいして一定の過渡期が必然的に存在する、ということに重点があった。しかしながら、現実の移行にさいしては、共産主義の第一段階への到達のためにも一定の過渡期が必要であり、しかもこの過渡期（「本来の過渡期」の前段階）の課題をもっぱら一国規模で解決することを余儀なくされたのである。社会主義の現状は、この一国的過渡期すらも、現在の部分的社会主義においては完全な意味で終了してはいないことを示している。マルクス、エンゲルスにおいてもレーニンにおいても、共産主義の第一段階としての社会主義が全世界的規模で成立するものとして想定されていないことをみれば、この部分的社会主義の不完全さは論理的に当然のことである。したがって、「本来の過渡期」と「世界的過渡期」は、部分と全体、前半と後半というような関係にあるのではなくて、まさに二重の過渡期としての両者のからみ合いが問題なのである。

マルクス、エンゲルスにおいては、社会主義考察の前提となつたのは資本主義社会の内在的法則性の分

析と批判であり、現実には直面したのはすでに世界的体制として成立していた十九世紀中葉の世界資本主義であった。この世界資本主義の具体的な分析と批判を通じて、抽象的論理的に想定された純粹資本主義の反対物としての、その必然的な転化形態としての、抽象的論理的に想定された未来社会の基本的特徴が提示された。このさいに、世界的体制としての資本主義に對置された未来社会が、同様に世界的な体制として考察されていたのは当然である。全世界的な規模での資本主義の成熟が、必然的に全世界的な規模での社会主義への移行をもたらす。移行の主體的・客觀的（物質的）前提はすでに資本主義の發展の過程で十分に成熟しているので、この移行は一挙に実現し、生産手段の社会的所有への転化とともに計画的な生産と分配が可能になる。したがって、共產主義の第一段階としての社会主義に移行するための特殊な過渡期は原理的に存在しない。共產主義の高度の段階（狹義の共產主義）に到達するためには、生産力の高度の發展とそれによる上部構造の變化（国家の死滅、人間意識の變革を達成する一定の過渡期が必然的に存在する。しかしまた、マルクス、エンゲルスにおいては、高度の段階への移行も、資本主義の桎梏から解放された人間労働の巨大な可能性の全面的な展開によつて急速に実現するものと想定されていた。したがって、共產主義の第一段階（社会主義）と高度の段階（共產主義）との具体的な相違については、マルクス、エンゲルスの諸著作の中では十分に明らかにされてはいない。この問題に關してマルクス、エンゲルスの著作をよりどころにする場合には、それが具体的な情勢を考慮した戰術的な指摘であるのか基本的な理念に關するものであるのかを注意して読みとらなければならないであろう。

レーニン、彼が直面した二十世紀初頭の帝國主義階段における世界資本主義の分析と批判によつてマルクス、エンゲルスの資本主義批判をうけつぎ、社会主義、共產主義についての彼らの指摘を整理して純化させた（『国家と革命』その他）。世界的体制としての資本主義に對するレーニンの基本的認識がマルクス、